

～基幹理工学部～ 若手研究者の声

数学科 助教

(2015 年度 若手研究 B 採択)

研究費の獲得実績を人事採用の判断基準の一つとしているところが多いので、自分の今後のキャリアを考えると、科研費には応募した方が良く考えていました。

国内外の研究集会や学会などに複数回参加しようとする、個人研究費などの学内研究費だけでは足りないという事情もあったので、科研費のおかげで自分の裁量で出張に行けるようになり、とても重宝しています。

同じ数学分野でも、研究内容によっては個人研究費だけで研究を進めることが可能な分野もあるかもしれません。ただ、現在の任期終了後のキャリアのことを考えると、科研費を獲得して不利に働くことはないと思います。

また数学分野の場合は、実験装置などを必要としないので、次の赴任先で科研費テーマを継続できないという事態もないと思います。科研費応募時に次の赴任先が未定のため応募をためらうことがあると聞きましたが、気にせずに応募した方が良くと思います。

応用数理学科 助教 森倉 悠介さん

(2015 年度 若手研究 B 採択)

まだ自分自身の業績が少ないので科研費に応募するかを迷いましたが、獲得されている先輩から「業績はあるに越したことはないが、若手研究 B は研究目的や計画が書けていれば採用の可能性はある」とアドバイスを頂戴しました。また、たとえ不採用になっても大学から特定課題 B という助成金が支給されるため応募を決めました。

申請書作成には 2 週間程度かかりましたが、研究推進部のホームページに 100 件以上のモデル調書が公開されているので参考にしながら作成することができました。

科研費に採用されると自分の裁量で出張や設備購入ができるので非常にありがたいです。科研費で購入した設備は異動先にも持っていくことができるので、今後の継続研究という観点でも非常に助かります。また、他機関への就職の際も科研費の獲得実績が役に立つと聞いています。

応募前から不採用になることを考えて諦めずに応募してみたいかがでしょうか。

機械科学・航空学科 准教授

(2014 年度 若手研究 他 採択)

本学に着任してから、若手向けの科研費に 3 回応募し、3 回採択されました。科研費の良いところは、自らの着想と興味に基づいて、新しい研究テーマをゼロから立案し、申請できる点です。さらに科研費に採択されれば、研究設備の拡充や学問的交流のチャンスが格段に増え、研究者としての自信も深めることができます。

科研費の申請書作成に際しては、決められたフォーマットの中で、読みやすく、分かりやすい文章を書くことに、いつも苦労します。特に、まだ結果が明らかになっていない研究の帰結を予想し、その重要性や波及効果を説得力のある文章にまとめる作業は、決して楽ではありません。しかし、幅広く情報収集しながら申請書を作成することで、当初の着想は次第に具体化され洗練され、申請書が完成する頃には、新たな研究のスタート地点に立っている自分に気付くことでしょう。科研費の申請においては、過去の研究業績以上に、研究提案の中に込められた冒険心が何よりも大切ではないかと感じています。

情報理工学科 助教 望月 義彦さん

(2011 年 研究活動スタート支援採択、
2014 年度 若手研究 B 採択)

研究活動スタート支援に応募した時は外部資金雇用の研究員でしたが、自分でテーマを持ち、自由に使用できる研究費を取得したかったという理由から応募しました。

次のポストのことを考えると、外部資金の獲得実績がある方が有利ですし、科研費は採択より不採択になる確率の方が高いので、あまり細かいことは気にせずに応募をしました。

申請書は 1 週間程度で書きました。今までやってきたこと、これから何をやるのか、を決められた様式にコンパクトにまとめるという経験はたとえ不採用になったとしても無駄にはならないと思います。

アカデミックの世界に残るつもりの方は今後のキャリアのためにも科研費に応募した方が良くと思いますし、早稲田大学には科研費に不採択となっても特定課題 B という学内助成金が受給できるという恵まれた環境があるので、利用した方が良くと思います。

表現工学専攻 次席研究員

(2011 年度 若手研究 B 採択、
2014 年度 挑戦的萌芽研究採択)

研究者を志す身として、主体的に自分独自の内容の研究を進めたいという気持ちがあったので、科研費の応募は必須と考えており、若手研究 B に応募しました。無事に採択され、若手研究 B が終了となった後は、挑戦的萌芽研究に応募しました。

挑戦的萌芽研究という研究種目では、独創的な発想に基づく、挑戦的で高い目標を掲げた研究計画が評価されます。その申請書では、他の研究種目と異なり、研究実績を全く書かなくてよいという特徴があります。しかし他方で、挑戦的萌芽研究には、大型の科研費に採択されているようなベテランの先生方も多く応募します。私が無事に採択されてひしひしと感じたのは、内容や申請書の書き方がしっかりしていれば、採択されるということです。

挑戦的萌芽研究が終了後は、これまでの研究を発展させて、より大型の研究費に応募したいと考えています。

～創造理工学部～ 若手研究者の声

建築学科 助教 山村 崇さん

(2015 年度 若手研究 B 採択)

科研費に応募したのは、単純に研究費が必要であったということもありますが、将来の研究者としてのキャリアを考えたときに競争的資金の獲得実績が重要になるという理由が最も大きかったです。また、民間で研究職を志望する場合でも、競争的資金の獲得実績は重要であると理解しています。

4 月に着任になった直後に研究活動スタート支援に応募することもできたのですが、自身の博士論文の発表等の時期と重なっていたので、応募を見送りました。今から振り返ると、競争的資金獲得のチャンスがあるのであれば、以後のキャリアのことも考え応募した方が良いと思います。また、急いで研究費が必要となる場合でなくても、早期に研究費を獲得し、研究設備を整えておくことで将来の研究への投資をすることができた、ということも振り返って感じます。

企業や自治体からの委託研究費を獲得している方であっても、科研費は広く一般に評価されている研究費ですし、積極的に応募する価値が十分にあると思います。

経営システム工学科 助手 三川 健太さん

(2014 年度 若手研究 B 採択)

着任したその年に若手研究 B に応募し、採択されました。その時は、仮に若手研究 B が不採択となっても、審査結果で一定の評価を得ていれば特定課題 B に採用されるという考えもありました。

学内研究費だけでは出張（特に海外）に十分な回数に行くには自分にとっては不十分なところ、科研費のおかげで出張の自由度が増しました。特に学会で、発表ではなく一般参加であっても旅費を支払うことができるので助かっています。

科研費は主に、書籍、出張、論文投稿費に使用しています。知識を深めたり、人脈を広げたり、将来を見据えて自らのためになるような使い方を心がけています。また、研究室の研究費で高額のものを購入することは気が引けて、頼みにくいですが、自分の科研費であれば自由に使うことが出来ます。

助手の方々と、博士論文の執筆で多忙な方もいると思いますが、そういった方こそ、科研費を獲得し研究を進展させることで、博士論文の完成に近づけるのではないかと思います。

環境資源工学科 助教 長尾 全寛さん

(2014 年度 若手研究 B 採択)

過去に、自身の用務が忙しいこと、業績が足りないと思ったこと、書き方がよくわからないこと、などを理由に応募を見送ったことがあります。しかし、今振り返ると、その頃に応募をしておけば良かったと感じています。

科研費の申請書は、初めて作る時は気が重かったのですが、いざ取り掛かると、1 週間程度で作成することができ、応募を見送る理由になるほど大変ではなかったです。また一度応募すると応募の流れがわかり、次からが楽になります。まずは勇気を持って一歩踏み出すことが大切だと思います。

人事採用の際に、科研費の獲得実績で組織貢献度などを見る場合があると聞いたことがあるので、初めて作成する時は気が重いかもしれませんが、次のポストのためにも科研費には応募した方が良いと思います。

また、科研費で購入した設備備品は次の赴任先にも持っていくことができるので、異動後にも研究環境の確保できるので、大変便利だと感じています。

社会文化領域 助教 板井 志郎さん

(2014 年度 若手研究 B 採択)

自分が助手だった当時は、周りも科研費に応募をしていたので当然応募するものだと思っていました。業績が少ないという思いはありましたが、応募しないと採択もされないのが気にせずに応募をした記憶があります。

将来のことを考えると科研費の応募資格があるのなら、応募した方が良いと思います。たとえ今、研究室に潤沢に研究資金があつたとしても自分が自立し研究室を持つようになった時は、自分の力で研究費を獲ってこないといけません。自分も助手の当時は気付かなかったのですが、科研費応募は自立に備えたトレーニングになることは間違いないので継続的に応募した方が良いと思います。

また、現在、博士論文を書いている段階であれば、そこに書く今後の課題や展望はそのまま科研費申請書にも流用できるかもしれません。そうすることで工数がそんなに掛からずに申請書が書けるかもしれないので、最初からあきらめずに応募できる方法を考えてみてはいかがでしょうか。

～先進理工学部～ 若手研究者の声

物理学科 助手 長岡 央さん

(2014 年度 若手研究 B 採択)

助手に着任した年度に科研費を応募しました。科研費を獲得しておく、研究の幅が広がります。また、今後の研究者としてのキャリアにも、研究費を自分で運用するという経験はよい影響があると考えました。

前もって申請書の構成は漠然と考えておいて、申請書そのものは 1 週間程度で書き上げました。研究室のスタッフの方や教授に申請書を見せ、さらに大学で実施している添削指導システムを活用することで、申請書を洗練させていきました。

私は部品購入や出張（海外学会等）で主に科研費を使用しています。学内予算だと海外出張には不十分になりがちです。研究の幅が広がったと感じています。

若手研究 B は 2 度までしか採択されないという制限がありますので、若手研究 B が終了になった後は、今の研究を進展させて、より大型の若手研究 A に応募したいと思います。

応用物理学科 助教 吉岡 潤さん

(2015 年度 若手研究 B 採択)

自分の研究は基礎研究なので、企業のパナソニック等の研究費と比べると科研費の若手研究 B が一番採択率の高い研究費でした。（若手研究 B の採択率：約 30%）

研究費が沢山あり、研究費に困ることがない研究室もあるかもしれませんが、使用にあたっては先生にお伺いを立てなければならぬと思います。その場合、自分が思い切ったチャレンジをしたいと思っても、言い出しにくい、または先生も忙しいので、なかなか相談することができず実行できない、というケースもあるかと思います。個人研究費もありますが、私は実験系なのでそれだけでは足りません。そのような時、自分の裁量で自由に使用できる研究費があれば、自分の考えで研究を進められると思い、科研費に応募しました。

作成期間は構想から完了まで約 1 が月かかりました。一度申請書を作成すると、たとえ不採択になったとしても次何かに応募する際のたたき台として使えるので、応募資格があるなら応募することをお勧めします。

化学・生命化学科 助教 菅谷 知明さん

(2013 年度 若手研究 B 採択)

私は前任機関の任期最終年度に若手研究 B に応募しました。現職の採用時には科研費採択が決まっていなかったため、現在研究室で行う研究テーマと科研費のテーマは少し異なります。その為、科研費テーマは前任機関で実験を行うことが多いですが、研究を進める上で困ったと感じたことはないです。

助手や助教は独立した研究者として自分のテーマを持ってもおかしくないと思うので、一人の研究者として研究費を獲得し、自分の研究テーマを遂行していくのは当たり前のことだと考えています。

科研費の申請書作成には構想から 1 か月程度かかりました。若手の間はどうしても指導教員が行っている研究内容と重なってしまうところがあると思いますが、その内容に α のオリジナリティをいかに加えるかがポイントだと思います。

また一度申請書を作れば、他の研究費や助成金などに応募する際の基礎になるので、様々な用務で忙しいかもしれませんが、早い時期に一度作成することをお勧めします。

応用化学科 助教 瀬下 雅博さん

(2015 年度 若手研究 B 採択)

科研費を獲得前までは、自分の研究と深い関わりがなさそうな海外学会は、先生に相談することなく自主的に参加を諦めることがしばしばありました。科研費があると、このような海外学会にも行くことができるようになり、参加することで研究の幅が広がるのではないかと考えています。

科研費の申請書作成は研究推進部 HP に公開されているモデル調書を参考にしながら構想から約 1 か月で行いました。

任期最終年度の場合、科研費応募時点では次年度のポストが未定のため申請書を書きにくいという声もありますが、たとえ他機関に移っても研究設備を借りることは可能かと思えます。科研費は採択後、交付申請書という書類を提出しますが、そこには研究計画を書く欄があります。応募時と異なる環境になった場合も、採択時点の計画を書けば問題ないです。

人事採用の応募フォームに外部資金獲得実績を書く欄を設ける大学も多いので、将来的に大学等で研究を続けたいと思うのであれば科研費には応募するべきかと思えます。

生命医科学科 助教 藤枝 俊宣さん

(2013 年度 若手研究 B、2015 年度 若手研究 A 採択)

初めの頃は、応募してもなかなか科研費に採択されませんでしたが、色々な工夫をすることで採択されるようになりました。確かに、不採択になった申請書と採択になった申請書を見返して比べてみると、強調の仕方や構成が大きく異なると感じます。例えば、概念図だけでなく、予備実験で得られた写真やグラフを申請書の中に盛り込むだけで、申請書に説得力を持たせることが出来ます。

若手研究 B の場合は、研究業績が少ない場合でも、採択されるチャンスは十分にあります。仮に採択されなくても、次年度以降の応募に役立てることが出来ますし、文章を作成する訓練やこれまでの研究を振り返る良い機会にもなります。

とは言え、なかなか自分独自の切り口を考え、申請書を書くことは難しいものです。しかし、遅かれ早かれ独立した研究者として、オリジナルな発想のもと研究費を獲得していかねばならないのですから、早い段階からチャレンジしておくことで訓練にもなりますし、決して悪いことはないはずです。

電気・情報生命工学科 研究員（助教）

(2014 年度 若手研究 B 採択)

私の研究は実験系ですので、どうしても試薬や機器が必要となるため、自ら主体的に研究をするには自分で研究費を獲得する必要を感じ、応募しました。

若手研究 B 以外にも科研費に採択された経験があります。その申請書では研究実績が比較的少ないかな、と思いましたが、採択されました。研究業績のみが重要ではなく、研究内容の提案が明確であれば、採択の可能性の向上が期待されます。リターンを考えると、業績にとらわれずに積極的に応募した方が良いと思います。

特に、着任になった直後（科研費の応募資格を得た直後）は研究活動スタート支援（4 月下旬頃締切）に応募できますし、それが不採択になっても、若手研究 B に応募できます。

更に言うと、若手研究 B が不採択となっても、審査結果が一定以上ならば特定課題 B という学内の助成金が交付されます。多くのチャンスがあるということは、今後研究をしていく上で知っておいて損は無いと思います。